

# 集團心理現象の概念及び本質

米田庄太郎

集團心理現象の概念及び本質に關する最近の主要なる諸説を批判的に考察して愚見を陣述するのが本論文の目的である。而して集團心理現象の本質を出来るだけ正確に究明するには先づ其の概念を出来るだけ明白に決定して置くことが必要である。

集團心理現象 *Kollektiv-Psychischen Erscheinungen* と云ふ語は今や歐米諸國の學界に於て一般に使用されて居る。併し其概念は明亮を缺いて居る。英米佛等の學者は一般に之を社會心理現象或は社會現象と云ふと同じ意味に解する傾向がある。又獨逸の學者は一般に之を民族心理現象と云ふと同じ意味に解する傾向がある。而して余の知る範圍内では集團心理現象を社會心理現象や社會現象や又民族心理現

象より明らかに區別し、之を特別なる部類の心理現象と見て、其概念を嚴格に限定したる意味に於て決定せんと企て始めたのは伊太利の學者である。彼等はかゝる限定した意味に於て集團心理現象の概念を決定し、而して社會學や社會心理學や又は民族心理學より獨立する一箇の科學として集團心理學なるものを新たに建設せんとする企てを始めて起したのである。されば茲に先づ彼等の集團心理現象の概念を論究しやうと思ふ。

今伊太利の學界に於て始めて限定せる意味の集團心理現象の存在を認め、且つ之を對象とする特別なる一科學を新たに建設するの必要を覺つたのはエンリコ、フェルリ (Enrico Ferri) であると思ふ。氏は千八百八十一年に公にした「刑法及び刑事訴訟法の新見地」(Nuovi orizzonti del diritto e della procedura penale) の第一版に於て、心理現象としては箇人の集合は必ずしも常に彼等の各々の總計に均しき結果、即ち社會現象を生起せしむるものでなく、一種新しき結果を生起せしむる場合もあることを論じ、箇人心理學と社會學との中間に位する一の新しき科學を建設するの可能及び必要を簡單に説いて居るが、同書第二版に於ては更にやゝ詳しく此見解を論述し、且つ其新科學に集團心理學 *La psicologia collettiva* と云ふ名稱を與へて居る。尙ほ同氏は此問題に

就て其名著刑事社會學 *La sociologia criminale*, 4<sup>th</sup> Ed. 1900) の中にも論じて居るが、要するに氏は箇人心に於て現はるゝ箇心理現象と永續的なる社會全體に於て現はるゝ社會心理現象或は社會現象との中間に多少偶然的なる種々なる人類集團例へば公衆市場、取引所、工場、劇場、集會、議會、學校、兵營等に於ける人類集團に於て現はるゝ特別な心理現象、即ち集團心理現象の存在するを認め、而して此集團心理現象は箇心理學の法則によりても亦社會學の法則によりても、全くは説明さるゝことの出来ないもので、夫れ自身特別な或法則を有するものであると考へるのである。つまり集團心理現象は箇心理現象でも亦箇心理現象の總計たる社會心理現象或は社會現象でもなく、夫れ自身新しき或物にして、夫れ自身特有の法則を具へ、而して此の特有の法則を研究するものとして特別な新しき心理學即ち集團心理學が成立するを得、又之を建設することが必要であると考へるのである。更に氏は特に社會學と集團心理學との差別を論じて社會學は永續的なる人類團體を動的に考究するものなるに對して集團心理學は多少偶然的一時的なる人類團體を靜的に考究するものであると云ふて居る。

フェルリは、以上述べし如く、始めて箇心理現象や社會心理現象、或は社會現象より

區別せる限定した意味で集團心理現象の一般的概念を決定せんと試み、且つ之を對象とする新科學の可能及び必要を説破したのであるが、併し彼の集團心理現象の概念の説明には尙ほ粗雑な又曖昧な點があり、且つ氏は集團心理學の實際的建設を企て、居らない。而して氏の集團心理現象の概念を一層明確に決定し、更に集團心理學を其最も特有なる領分、即ち群集心理に就て實際上建設せんと試みたるは、氏の門下の著名なる學者シゲル(Scipio Sighele)である。

シゲルの集團心理學上の最初の著作は千八百九十一年に出版された「犯罪的群集論」(La folia delinquente)であるが、氏は之を増補して千八百九十五年に其の第二版を出版し、更に千九百二年には之を全然改正し、又其題名をも群集犯罪論「I delitti della follia」と改めて出版された。又本書第一版は千八百九十二年に佛譯せられ *La foule criminale, Essai de psychologie collective* と云ふ題名で出版されたが、千九百二年には第二版として其の全然改正せられ又大に増補されたものが出版された。本書は、群集心理を始めて組織的に論述せるものとしてタールドの「犯罪的群集及び派」と相並んで有名である。氏は更に千八百九十七年に「派の犯罪」(La delinquenza settaria) 佛譯 *La psicologia des sectes*, 1898) を公にした。而して氏の集團心理現象の概念及び集團心理學の概念に

關する見解は右の「犯罪的群集論」の序論及び「派の犯罪」或は「派の心理」の第一章に於て論述されて居るが、茲に其大要を述べて置く。

夫れスペンサーは團體の一般的性質に之を組成する單位の性質によりて決定せらるゝものであると云ふ原理を立て、此原理を總ての人類社會に適用して之れが研究を試みて居るが併し茲に大に注意す可き點がある。今同質的なる單位が有機的に結合してなれる社會團體にありては、スペンサーの原理は全く正確にして其儘に適用されるのである。然るに單位の同質性小にして、其の結合の有機性も亦小なる社會團體にありては、此原理は只大に制限されたる範圍に於てよりは適用され難くなる。而して更に異質的なる單位が無機的に結合して成れる社會團體にありては、此原理は絶對的に謬妄となり、全く適用され難くなるものである。是に於てか箇人を研究する心理學と社會全體を研究する社會學との中間に、陪審官議會、集會、劇場等に於て見るが如き箇人の特定なる集團にして、其の發動に於て、箇人心理學の法則にも亦社會學の法則にも従はずして夫れ自身特別の法則を有するものを研究す可き科學の一分枝、即ち集團心理學なるものが建設せらる可き必要が生じてくるのである。要するに社會學は同質的にして有機的なる社會團體の法則を研究する者なる

に對して、集團心理學は同質性及び有機性の小なる社會團體殊に異質的にして無機的なる社會集團體の法則を研究するものである。更に社會學は人類社會を其の歴史的進行に於て研究するもの、即ち動的見地より社會有機體を研究するものであるが、之れに反して集團心理學は一定の時及び場處に於ける人類社會を研究す可きもの、即ち一定の時及び場處に就て靜の見地より社會的集團を研究するものである。かの細胞の集合體たる一切の生物有機體内に於て、豫見されない化學的反動の時々起る如く、人類の集合體内に於ても亦神秘的なる心理的反動が時々起るのである。然るに此等の奇異なる心理的醗酵現象に就ては從來社會學は全く注意して居らない。是に於て之を特に研究する集團心理學なるものが必要となるのである。而してさきに列舉せる多少異質的にして又無機的なる人類集團、即ち陪審官、集會、公衆、劇場、其他總て多少一時的偶然的に成立する人類集團の内、最も多く社會學の法則より離れ、之れに反して、最もよく集團心理學の法則に従ふものは群集である。實に群集は勝れて異質的なる集團である。といふのは群集は年齢の別、男女の別を問はず、總ての社會階級、總ての社會的狀態に屬し、又道德性及び教育の總ての程度に屬する人々を包容して成立するものであるからである。群集は又實に勝れて無機的なる

集團である。と云ふのは群集は人々の豫めの合意なく、卒然に又偶然に成立するのであるからである。されば群集心理現象は集團心理現象の法則の作用を最もよく發揮し、又其機制メカニスムを最もよく表現するものであるのである。

以上述べし處によりてシゲレがフェルリの思想を展開して、集團心理現象及び集團心理學の一般的概念を如何に決定せんと試みたかは大體上明らかに理解されるところと思ふが、要するにフェルリやシゲレの見る處によれば、集團心理現象とはつまり異質的な箇人が豫めの合意なくして、一定の場所に於て偶然的一時的に作る集團に於て忽然發現する心理現象であつて、かの同質的な箇人の有機的永續的結合より成れる社會全體に於て歴史的連續的に生起し發展する社會心理現象或は社會現象とは其性質を異にし、隨ふて之れとは明らかに區別せらる可きものである。

今集團心理現象の概念を、箇人心理現象殊に社會心理現象及び社會現象より區別せる限定した意味に於て決定せんとする伊太利の學者は一般に大體上シゲレの見解を遵奉して居るのであるが、然るにシゲレの見解に於ては社會心理學と社會學との關係は判然して居らない、隨ふて此等の學問と集團心理學との區別及び關係に付ても亦曖昧な點がある。それで更に其等の點を明確に決定する必要が感ぜられ、而

して之れが考究に力を盡くした幾多の學者があるが、其中で殊に注意す可きはグロブバリ(Groppali)及びストラチコ(Stratico)であると思ふ。但シストラチコはグロブバリの説を祖述して之を一層組織的に論述したに過ぎないが、併し其の一層組織的に論述したと云ふ點に於てストラチコの述ぶる所は吾人をして其説の眞義を一層よく理解せしむると思ふから、茲には同氏の所述の概要を述べて置く。

ストラチコは千九百六年に「集團心理學」*La psicologia collettiva*と題する一書を公にし、斯學の始原發達、現状及び其の組織、研究法、效用等に就てやゝ詳しく論述して居るが、斯學の性質、範圍、問題並に之と社會學及び社會心理學との關係に就ては、グロブバリの説[Saggi di Sociologia, 1899, Sociologia e psicologia, 1902.]を祖述して一層組織的に論述して居る。而して其の論ずる處によれば、夫れ社會生活の多種多様な發現を完全に研究するには科學的分業が必要である。此くて法律、道德、經濟、言語、藝術教育等に就て夫れ夫れ獨立なる特殊的社會科學が成立し、又發達し、あるのである。然るに他方より見れば此等諸般の社會科學は社會生活の諸種の發現を密接に結び付ける紐帶の存在するが爲め相互に親密に關係して居る。此くて諸般の社會現象を其總體に於て考察するの必要が起つて來る。即ち人類社會の統一的學問の必要が起つてく



る。而て此必要に應ずるものは即ち社會學である。要するに社會學は諸般の社會科學の結果を組織し整合し之を公通分母に還元して其根本的意義を理解し又其の必然的關係を闡明するものである。社會學は此の如く社會的實在の統一的一般的學問であるが然るに人類團體の心理學は只社會的實在の一方面を研究するに過ぎないものであるから、やはり特殊なる社會科學として社會學に結び付くものである。而して人類團體の心理學は夫れ夫れ特別の對象と職分とを有する二種の科學に別たれる。一は社會心理學にして、二は集團心理學である。

社會心理學は實質上から云へば其始源甚だ古い。併し之を一箇獨立の科學と見る思想は近代の產物である。而して斯學の概念に就ては諸家の説く處種々様々にしてまだ一定して居らないが、恐くはザントの民族心理學の概念を批判的に考察して立てたるグロブパリの説は最も穩當であらうと思ふ。即ち社會心理學とは社會的集團の共同精神が其組成要素たる衆箇人間に於ける動反動の關係によりて發生し發展する其の社會心理的過程の內面的機制 *il meccanismo o la tecnica interiore dei processi sociopsichici* 及び共同精神か一度成立したる以上結果より原因に轉化して箇人意識の上に及ぼす影響又其の上に生ずる結果を研究するものである。然るに其研究

が段々進歩するにつれて近來其内より集團心理學が分化して一箇獨立の科學となつて來たのである。要するに社會心理學は始めは人類團體の心理的現象は總て之を包括して研究して居つたのである。即人類團體の發現する動的性質の心理現象も亦靜的性質の心理現象も總て之を包括して研究して居つたのである。然るに近來其研究の進歩するにつれて、時間に於て生動し歴史に於て徐々に進化する安定的な有機的に組織されたる社會團體に特有なる心理現象、即ち動的社會心理現象の方向を自己の分野として保留し、之れに對して短時期の間同一の場所に於て成立する偶然的無機的にして異質的なる集團より忽然發現する社會心理現象、即ち靜的社會心理現象の研究は之を集團心理學に讓つて來たのである。茲に集團心理學の分野として社會心理學が讓與した靜的社會心理現象、即ち集團心理現象とは如何なるものであるかを一例を舉げて示して置くが、例へば市内の廣場或は街衢で突然或人の叫聲が起つて先づ數人が其の周圍に集まるとすると、夫より問もなく無數の人々が續々簇集してくる。勞働者がくれば教師もくる官吏も軍人も僧侶もくる。又男女老若貴賤の差別なく集まつてくる。此くて群集、即ち異質的な無機的な一時的な集團が出来る。而して此くの如にして出來上つた群集内より特異なる性質の心理現

象即ち靜的社會心理現象と稱せらるゝもの、つまり其瞬間、其場所に於て全く豫期されない刹那的な無意識的な方法で産出せらるゝ知力的、感情的及び意志的表現が生起する。此の如き現象は劇場集會、議會其他總て不安定的無機的なる人類の集團に於て發現する同様な他の諸現象と共に集團心理現象として集團心理學の對象となるのである。

今集團心理學なるものはもと社會心理學の内に含まれて居つて、後に其れより一箇獨立の科學となつたのであるから、其の範圍目的は之を社會心理學の範圍目的と對照して考察するに非ずば明瞭に理解することは出來ないのであるが、さらに兩者の取扱ふ現象の間には絶へず交渉がある。蓋し兩種の現象は同一の根源より流れ出づるものであるからである。而して多くの靜的集團心理現象は多數の箇人心に固着して時間的に延長し種々に變動しつゝ遂に動的に新しき永續的なる生産物に結合するのであるが、之れに反して又多くの社會心理的生産物、例へば風俗習慣、傳説、迷信等のものは、群集其他の不安定的一時的なる集團の心理的發動の上に種々に影響して之れに特異なる形質相貌を與へるのである。一二の例をあげて之を説明せんに、例へば學校に於て教師の熱誠な照明的な講演が深く學生の心情に觸れ、彼等

の腦裡に共同的思想や理想を産出するとすると、其の思想や理想は永く彼等の記憶に残り時々復活し、益膨脹して子孫に傳はり、遂には一の傳説に化するのである。又之れと異りて群集は其發動に於て其成員の民族的或は人種的特性、信仰、支配觀念等の微妙なる影響を受けて居る。而して其場合に吾人若し其等の社會心理的生産物をよく熟知して居るに非ずば、其群集心理現象を到底十分に理解することは出來ないのである。

以上シゲレ及びストラチコの説を述べて、今日集團心理現象の一般的概念を社會心理現象或は社會現象より區別せる限定した意味に於て決定せんとする一派の伊太利學者の見解を明らかにしたと思ふが然らば、今集團心理現象の一般的概念を此等諸家の解するが如き意味に於て決定するは果して穩當であらうか。

ロッシはやはり著名なる伊太利の集團心理學者にして斯學に關する多數の著作論文を公にし、且つ嘗て斯學専門の雜誌をも發行して居つた人であるが、氏は斯學の概念及び之と社會心理學や社會學との關係に就ては殊に左の諸書に於て詳論して居る。Rossi, *L'anima della folla*, 1898. *Psicologia Collettiva*, 1900. *Sociologia e psicologia collettiva*, 1904.

*Discorrendo di psicologia sociale e collettiva*, 1905. 而て氏は實質上上に述べし集團心理現象

の概念を承認して居るが併し種々の點に於て修正を加へて居る。吾人は先づ氏の説によりて該集團心理現象の概念を其儘に維持するが如何に困難であるかを學ぶのである。氏は該集團心理現象の概念に於て靜的と云ふことが動的と見做さるゝ社會心理現象より之を區別する標準となつて居ること、即ち動的なるや又は靜的なるやと云ふことを標準として社會心理現象と集團心理現象とを區別せんとする見解を論評して、今若し社會心理現象は動的にして、之れに對して集團心理現象は靜的であると見て兩者を區別せんとする見解を承認するに於ては、吾人は其の動的及び靜的と云ふ觀念を餘程廣義に解せねばならぬと云ふて居る。蓋し氏の考ふる處によれば集團心理現象は只尙ほ分化しない原始的な群集に就て云ふ場合に於てのみ靜的にして、之れより其の近代的な他の形體即ち公衆や又一層安定的にして分化せる諸形體に移つて考察する場合には其は或度に於て動的となるものであり、之れに反して幾世紀を経て形成せられ發達する社會心理的事實、例へば神話とか言語とか云ふものは一般に動的であるが、併し其始源又は存在の一定の時期に就て見れば明らかに靜的であるからである。此くて氏は動的及び靜的と云ふことは只大體上の傾向を示すに過ぎずして、吾人は之を以て社會心理現象と集團心理現象との兩者

を絶對的に區別する標準となし、又兩者の定義の唯一の支柱となすことの出来る確實なる性質ではないと論斷して居る。夫れよりして氏は、集團心理學を以て簡單に靜的に人類集團を考察する心理學と解釋するは穩當ではない、宜しく之を以て如何にして多數箇人心が群集に支へられ、始めには靜的現象、つまり空間及び時間の制限されたる範圍内に於て開展する現象、後には動的現象、即ち空間及び時間に於て無制限に延長普及する現象によりて、單一なる心に結合するかを研究する一分科であると解釋す可きものであると云ふて居る。

ロスシは更に進んで社會心理現象と集團心理現象とを區別する標準を、動的とか靜的とか云ふが如き外部的性質に於て求むるは十分でない、宜しく兩者の内の性質に於て求む可きものであると論じ、集團心理現象とは附加されたる人種性の差異や民族性の差異如何に關せず、總ての人間に共通する還元す可からざる人間的性質の方面より見たる範圍内に於て群集の發現する心理的現象にして、社會心理現象とは超有機的及び人間的なる一般的性質の上に人種的又は民族的なる他の性質の加はれる集團の發現する心理的現象である、換言すれば集團心理學は超有機的人間的なる一般的性質の方面より見たる範圍内に於て群集を研究し、社會心理學は此の如

き基本的なる性質の上に民族的又は人種的なる性質が加はり、群集が一の民族又は人種となれる範圍に於て之を研究するものであると云ふて居る。

以上述べし處によりて見れば、ロスシは先づ動的と靜的との別によつて、社會心理現象と集團心理現象とを區別せんとすることの不確實或は曖昧なるを覺り、更に進んで全く他の方面より見て新たに兩者の區別を立てんとするのである。併し氏の新見解は果して穩當であらうか。

スキルラチエは今日著名なる伊太利の社會學者であるが、其大著(Squillace, *Critica della Sociologia* 第二卷 I problemi costituzionali della Sociologia, 1907)及び氏の發行する萬國理論社會學叢書第三卷として公にされたるロスシの「社會學と集團心理學」の序文に集團心理學を一箇獨立なる科學として建設せんとするフェルリ、シグレ、グロブバリ、ストラチコ、ロスシ等の諸家の説を詳細に論評して居る。氏の論ずる處によれば、此等の諸家はつまり學問の對象と其研究方法又は見地とを混同する論理的誤謬に陥れるものにして、研究の方法又は見地が異なれば之れによりて直ちに學問の區別が立て得られるものと考へて居る。併し學問の眞實なる區別は對象の根本的差異に基づいて立てられる可きものにして、單に方法や又は見地の差異を標準として立つ可き

ものではない。もつとも方法又は見地の差異を以て學問分類の基礎と見做し得らるゝ場合はある。併しかゝる場合に云ふ處の方法又は見地の差異とは廣大なる一般的な意味に解す可きものである。即ち一切の學問の對象は根本的には統一的又は同一的のものであるが併し是れには種々なる不可還元的及び根本的な性質が具はつて居つて、而して之れが研究に對しては吾人の精神の本來の組織及び能力の上から到底超越し難き自然的制限が加へられて居ると云ふが如き意味に解して、始めて方法又は見地の差異が學問の區別の基礎となし得られるのである。然るに社會心理學と集團心理學とを二箇の獨立なる科學に區別せんとする人々が其の標準として居る方法又は見地の差別は此の如き意味のものではなくして、甚だ制限的な任意的な不適當なものである。今此等の人々が殊に高調して居るのは動的見地と靜的見地との區別であるが、併しかゝる區別を以て社會心理學と集團心理學とを區別せんとするは穩當でないことは其一人たるロスシが後に之を放棄し又は甚だ曖昧に附し去つて、新らたに標準を求めんとして居るのを見ても明らかである。而して氏が新らたに立てんとする標準、即ち對象の內有的性質の差異なるものもやはり甚だ曖昧なものであつて、實際上かゝる差別の立て得られないことは氏自身の研究を



見ても明らかである。又假りに氏の云ふが如き區別が立て得られるとしても此區別はやはり皮想的な意味の方法又は見地の差別に過ぎない。要するに社會心理學と集團心理學とを夫れ夫れ獨立なる學問として區別せんとする人々が其の區別の標準として居ることは對象及び學問的問題の眞實なる差別ではないので彼等の解するが如き意味では兩者を二箇の獨立なる學問と見ることは到底出來ないのである。尙ほ社會心理學と集團心理學とを二箇の獨立なる科學として區別せんとする見解が穩當でないのみならず之を社會學より區別せんとする見解も亦穩當でないと思ふ。全體此の區別を立てんとする人々は社會的事實と集團的事實即ち社會心理的事實と集團心理的事實との區別を基礎として居るのであるが其の社會的事實と云ふはつまり社會的の制度と云ふとに歸着し、又其の集團的事實と云ふはつまり社會的潮流と云ふことに歸着するのである。して見ると此等の兩者は社會現象と云ふ單一なる概念に還元し或は包括し得らるゝもの、又此くす可きものであることは明らかである。但し茲に社會現象と云ふはつまり社會に於て實現し、而して其の間には只心理的又は社會的開展の程度の差及び具體化と安定性の大小の程度の差を有するに過ぎざる社會的の制度と社會的潮流とを包括する處の客觀的な現實な觀察

し得らるゝ表現と云ふ一般的類的意義に解するものである。全體今日では生物學に於ても亦心理學に於ても構造と機能とを最早相反對又は相對立するものとは解して居らないのであるから、社會學に於ても吾人は當然同一の見解をとる可きものである。かの集團心理學の對象と云はるゝ社會的潮流も亦社會學の對象と云はるゝ社會的制度も共に、多少容易に變形し得らるゝ、又時の單位に對しては多少暫有的である機能的過程に還元せらるゝものである。而して此の如くに其對象の差別が還元せられ或は除去さるゝに於ては社會心理學及び集合心理學と社會學との區別は其當然の結果として消滅するのである。此事實は此等の學問を言葉の上で區別せんとする人々も暗に承認して居ることと察せられるので、例へばシゲレの如きも實際には集團心理學を社會學或は社會心理學より區別して居らないのである。氏が實際に論述して居る處を見るに、兩者は常に相交錯して居るのである。是れ兩者の研究する現象は大なる部分に於て共同的であるからである。社會に於て主として心理的性質の現象の存在すると云ふことは此等の現象が一定の特性によりて箇性化されたる特別なる一部類をなして以て一の新しき自律的なる學問の對象となると云ふことを意味するものでないのである。此事はロスシなども實際上よく認

めて居ると思はれる。されば集團心理學又は社會心理學と社會學とを區別せんとすれば、常に其の根據を集團心理現象と社會心理現象との間に立て得らるゝ形式と内容との或差別又は起源と表現或は客觀化との或差別に求むるより外に途はないのであるが、而もかゝる差別は實は兩者の間には明白に之を區別するに適する何等根本的なる差異の存在しないことを證明するものである。又社會生活及び社會心の實際に於て甚だ親密に根本的に結合する事實の間に明晰深奥なる區別の立て得可からざることを暗示するものである。集團心理的事實と社會的事實との間には甚だ親密な根本的な結合が存在して居つて、吾人は二ヶの異なる學問を建設し得る程の根本的差異を彼等の間に發見するとは出來ないのである。吾人は精々の處で只方法的見地又は教授の必要上からして之を區別し得るばかりである。要するに集團的事實と社會的事實との間に正當に立て得らるゝ差別は結局社會的現象と云ふ一般的概念の中に包攝し得らるゝ程の者である。されば集團心理學或は社會心理學と社會學とを對象の差別に基ける獨立なる科學と見做さんとする見解は、論理的見地及び内容の上から見れば、必然的な科學的な見解として維持さるゝだけの基礎或は性質を有しないものである。而して此等の學問の現状を冷靜に精密に吟

味して見ると、集團心理學或は社會心理學と社會學との對象の統一及び無差別隨ふて是れが科學的研究の統一及び無差別は明らかに理解せられるのである。

スキラチエは以上述べし如くに論じて、集團心理學を社會心理學より區別される獨立なる科學として建設せんとする見解も、亦此等の科學を社會學より區別される獨立なる科學と見んとする見解も共に之を排斥し、更に所謂集團心理學者が社會心理現象と集團心理現象とを區別する標準に用ひんとする諸種の事實をも適當でないと考へるのであるが併し集團心理現象と社會心理現象との相對的區別はやはり認めるのである、而して左の如くに論じて居る。即ち余輩は自律的な獨立な科學として集團心理學及び社會心理學の成立し得ないことを主張するものであるが、併し是れが爲めに集團心理現象及び社會心理現象を研究するの重要と既に之を試みたる人々の功績とを否認せんとするのではない、此等の現象は夫れ夫れ自律的なものであるか、又は相互に依屬するものであるか、主として心理的性質のものであるか、又は主として社會的性質のものであるか、何れにしても現實に在在するものであることは疑はれない。而して夫れ夫れ社會現象内に於ける重要な一部類をなすものにして、他の諸部類より區別せらるゝ一定の特徴を有するものである。されど余輩の

見る處によれば社會現象を主として心理的性質のものと主として社會的性質のものに分つ其區別を大に高調して考察することは、集團心理學者や社會心理學者が從來殊に力を入れて研究して居つた方面よりも一層有益にして、又一層よく余輩の論理的及び學問的原理に適合することと考へる。詳しく云へば單に社會的潮流即ち多少不安定的暫有的なる社會現象と社會的制度即ち多少安定的固結的なる社會現象とを區別するだけに止めず、更に集團的類型即ち暫有的ではあるが、或は表面的反照的に過ぎないとも云ひ得られるが、とにかく一定の歴史的及び社會的範域に於て殆ど普遍的に彌漫する處の主として心理的なる特性を表現する類型と嚴密に云ふ社會的類型即ち一定の歴史的及び社會的範域に普遍的に彌漫し、又之れが特徴を表示し、固定的にして主として社會的なる特性を表現する類型とを區別し、兩者が相伴なふて現實なる諸般の社會現象を決定するものなることをよく理解し、而して集團的類型を詳しく分類し、例へば知力的類型、感情的類型、意志的類型、愛國的類型、浪漫的類型のとか又は國民の特異なる一時的の相貌とか云ふが如きものに詳しく分類し、又社會的類型に就ても諸種の社會或は文明に特有なる、明確にして永續的なる諸類型を詳しく分類することが社會學上甚だ有益であるのである。要するにスキュラ

チエは集團心理現象を集團的類型として觀念し、之を社會的類型より區別するが、而も兩者の關係が甚だ親密なるが爲め之を二箇の科學に分配す可きものでなく社會學内の二部分として考究す可きものであると考へるのである。併しとにかくスキルラチエは社會現象の特別なる一部類として實質的に集團心理現象なるものを認めんとするのである。然るにミチエリの如きに至つては如何なる意味に於ても集團心理現象を特別なる部類のものと見る見解を排斥せんとして居る。それで終りに同氏の説の概要を述べて置く。

ミチエリ Miceli はペルデア大學の公法學の教授であるが、氏は特に法律の心理的研究を重要視して居るから、隨ふて集團心理學或は群集心理學の研究にもよく注意し、之れに對して精細なる批評を加へて居る。而して氏の見解は千八百九十九年伊太利社會學評論に於て公にされた一論文「群集の心理」*La psicologia della folla*, *Rivista Italiana di Sociologia*, 1899 に於て最も組織的に論述されて居るから、こゝには右の論文によりて集團心理現象の概念に對する氏の批評の一般を述べて置く。

今ミチエリは集團心理學の獨立を主張する人々の根本的謬見は、群集を以て總ての他の人類團體とは全く異なる特異なる團體と見ることでありと考へて居る。而し

て其の論ずる處によれば、いづれの社會團體も之を組成する箇人とは異なる或物を有つて居つて、決して箇人の性質をその儘に總計して復現するものでなく、何等かの新しき或性質を發生するのである。されば群集は其の組成要素たる箇人より異なる或物を有するとか、又群集をなせる人々は孤立せる人々とは異なる心理的活動をなすとか云ふことは、是れ總ての人類團體に通有の現象にして決して群集特有の現象ではないのである。群集がかゝる性質を具へて居るのは是れつまり群集は人類團體の一種であるが爲めにして決して特に群集であるが爲めではないのである。

更に群集が他の社會團體より異なる特徴を發現する場合に就て見るも、其等の特徴は特に群集であるが爲に發生せるものではなくして他の原因より發生せるものである。群集心理學者は同質的群集と異質的群集とを區別し、同じ民族同じ人種に屬する人々の群集が表現する共同的性質及結合力の大なるに反して、人種民族を異にする人々より成立する群集が表現する性質は種々様々にして、また、其の結合力の薄弱なるを説く場合には暗に右に述べし理を承認して居るのである。詳しく云へば彼等の立つる同質的群集と異質的群集との區別はつまり群集には最も異なる人々より成るものから最も同様なる人々より成るものに至るまでの總ての階段があ

つて、而して夫れ夫れの階段の群集の親密程度或は結合程度は單に人々が群集をなすと云ふことによりて決定せらるゝものではなくして、之をなす人々が種々なる境遇の下に於て獲得せる社會的性質の類同の程度によつて決定せらるゝものなることを暗に示して居るのである。群集に於て眞に共同的精神が發生し、集團的意識が成立し得る爲めには、其の群集をなす人々が可也永く共同生活を營んで居つたと云ふこと、及び單に偶然なる一時的會合によりて起るよりは一層強き又永續的なる利害傾向、感情等によりて結合されると云ふことが必要である。而して此の事はつまり群集内に於て集團的意識が成立し得るは只之を組成する人々が既に共同生活によつて準備されて居る場合に於てのみであることを意味するのである。

ミテェリが次に群集心理學の根本的謬見として批評して居る點は、群集心理學に於ては群集内にありては箇人は全く消失して、只集團的實在物のみが残り、而して箇人の人格は群集の形成せらるゝにつれて發生する新しき非箇人的人格の内に或方法に於て全く没入すると見ることである。ミテェリの論ずる處によれば事實群集心理學者の考ふるが如くであれば群集は確かに特異なる人類集團にして、群集心理現象はまた特異なる社會心理現象の一部類をなすものと認めることが出来る。併し實



際に就て詳しく吟味して見るに此の方面に於ても群集の發現する現象は一般に總ての人類集團の發現する現象とは毫も異なるものではなく、常に集團と箇人とは相並んで存立して居つて、決して箇人が全く集團中に没入して居るのではないのである。而して群集心理學者が此の如き謬見を抱くに至れる原因はつまり彼等が人類集團の性質及び其の有機的形成を觀念する方法の誤つて居ることにあるのである。全體集團は之を組成する箇人とは本來異なる或物である。而かも前者は全く後者の人格を滅却して成立するものでない。いづれの集團内にありても箇人格は常に集團人格と相並んで其存在を續けて居るのである。而も箇人格は集團人格を全く無視して觀念し得らるゝものでなく、各箇人は常に共同生活、共同存在に對して讓歩し、自己の存在の大なる又小なる部分を之れに融合せしむるものである。されど決して其の人格を全然其内に没却するまでには至らない。種々なる原因や事情は夫れ夫れの時代、夫れ夫れの社會に於て集團意識の自立に對して箇人意識の自立の程度を決定して居る。而して箇人意識自立の程度は其等の原因事情によりて時には極大に上り、時には極小に下る。而も箇人の自立は箇人が自我の念を全く失ふと云ふ程まで減弱することがなければ、また箇人の意識が集團の意識を全く脱却すると

云ふ程大なる勢力を有するに至ることもない。もつとも或群集殊に強烈なる印象に壓倒されて居る群集にありては箇人格の念、箇人性の感情が少くも其群集をなす大多數の大々に於ては、其最小程度に下ることあるは事實である。併し此場合に於ても決して全く消失することはない。而して又群集の意識は常に衆箇人意識の結合、詳しく云へば衆箇人意識の類同的或は共同的方面の結合として存立するものにして決して全然箇人意識を超越する或物となることはない。吾人若し此事實を承認しない場合には群集心理の多數の現象は全く理解され難いものとなる。例へば群集内に異なる傾向の並存するとか、群集の意見が忽然變化するとか、群集の感情思想行動等が一の極端より他の極端へ激變するとか云ふが如き群集心理特有の現象と稱せらるゝものは、つまり群集内に於て自己の力によりて發動する多數の能働的箇人が並存して居つて、彼等の間の關係が種々に變動することによりて集團意識が種々に變動するものなるを認むるに非ずば到底理解し得られない現象である。暗示模倣、傳染等は、大なる結合力にして衆箇人意識間に大なる親和團結を發生せしめ、思想及び行動の共同的形體の下に彼等を密接に結集し得るものである。而も此の結合、此の團結は常に箇人意識の抵抗の度合と暗示の及ぼし得る勢力の程度との合

成果である。集團意識と箇人意識との間には絶へず動反動が行はれて居る。而して此の動反動の過程が如何に進行するか、衆箇人意識が如何に結合するかによつて集團意識の整合或は首尾貫徹の程度が決定せられ、又其變動轉化が行はれるのである。

ミチエリは更に群集に於ける衆箇人意識の粘着或は融合の基礎換言すれば群集内の衆箇人意識を結合して集團的共同意識を成立せしむる紐帯となる心理作用の特徵に關する群集心理學の見解を批評して居る。今群集心理學者が群集に於ける箇人意識を結合し融合せしむる心理作用は感情にして觀念ではない、更に感情の内でも主として劣等なる感情にして高等なる感情でない、と主張するのであるが、ミチエリは之れを評して、左の如く論じて居る。此の見解に就いて彼等の説く處は巧妙を極めて居つて大に吾人をチャームする。併し事實には適合しない。若し彼等の考へる如く知力の發達は人々によつて種々異なつて居るが劣等なる性質の感情、本能、傾向等は萬人共通のものであるから、群集に於て人々を結合し、衆箇人意識を融合せしむるものは知力ではなくして、劣等なる性質の感情、本能、傾向等であるとすれば、同じ理によりて總ての人類團結の紐帯となるものはやはり知力ではなくして劣等な

性質の感情、本能、傾向等であると云はねばならぬ。併し事實は之に反對して居る。人々は常に感情に於て合致し結合するものが出来るのみならず、又知力に於ても合致し結合し得るのである。更に劣等なる感情に於て合致し結合し得るのみならず、又高等なる感情に於ても合致し結合し得るのである。若し然らば人類の進歩、社會の發達は全く不可能であると云はねばならぬ。而して群集は決して例外をなすものでない。群集に於ける人々は感情に於ても亦知力に於ても合致し結合するものが出来る。特に群集に於ける心理的紐帶は只劣等なる動機、衝動によつてのみ決定される。と見る可き理由は毫も存在しない。群集は劣等なる感情に於けると同様に高等なる感情に於ても結合し得るのである。而して群集が主として感情によりて結合せらるゝか、又は主として知力によりて結合せらるゝか、更に劣等なる感情によりて結合せらるゝか、又は高等なる感情によりて結合せらるゝかは、一に其の組成要素たる箇人意識の性質及び彼等の上に働く原因、事情の如何によつて決定されるのである。

ミチュエリは尙ほ此の外群集心理學の種々なる概念や法則に就て論評して居るが、今集團心理現象の概念を論究する上から見れば、以上述べし三點に關する氏の論評は

殊に重要であると考へるから、茲には只夫れだけを述ぶるに止めて置く。要するにミチヲは上に述べしが如き理由によりて集團心理現象を社會心理現象より區別せる限定した意味に於て特別なる部類の心理現象と見る所謂集團心理學者の見解をも亦スキルラチエの唱ふるが如き之を社會心理現象内の特別なる一部類の社會心理現象と見る見解をも總て承認せず、集團心理現象と社會心理現象とを全く同一視せんとするのである。而して此の如く集團心理現象と社會心理現象とを同一視する見解は獨伊、英、米等の學者間に於て一般に行はれて居るものであると思ふ。尙ほ獨逸の學者は此等の二者と民族心理現象とをも一般に同一視して居ると思ふ。但し此の場合に民族心理現象又は社會心理現象を歴史現象より區別せる特別の意味に解するヴント一派の見解もある。それで是れより更に此等諸國の學者の集團心理現象の概念を論究したる上にて愚見を述ぶることとする。但し本文中に述べし伊太利學者の集團心理現象及び社會心理現象の概念に就ては數年前公にせる拙稿、集合心理學の性質及び範圍、教育學術界大正二年十月、十一月及び十二月號中にも説述して居るから参考せられたい。(未完)